



## 「音のない世界で80年」

うめ の ふ よ こ  
梅野芙蓉子

1931年(昭和6年)  
熊本県阿蘇市生まれ、  
平井在住



### 聞こえないことが普通だから

2歳の時、中耳炎の高熱で耳が聞こえなくなると母に言われました。母は普通の人と結婚させたいと思っていたようですが、主人のお兄さんにお見合い写真だけで是非是非と言われました。何度も断っていたのですが、母も28歳だから仕方がないと、4回目のプロポーズで結婚を許してくれました。主人も、ろう者(耳に障がいのある人)でした。一度も会わずに、昭和33年11月に熊本市内で結婚式を挙げました。

私は昭和6年3月、熊本県阿蘇の母の実家で生まれました。父、母、1歳上の兄と4人家族でした。家は熊本市内でした。父は列車の郵便物を仕分けする公務員で2、3日に一度しか帰ってきませんでした。

耳が聞こえなくても、子どものころから差別されているとは感じず、近所や兄の友だちと木登りやままごとをして遊んでいました。

大病院の先生に、なるべく早く発語(口から声として言葉を出す)の訓練を始めた方がいいと言われ、昭和11年5歳の時、熊本県立盲啞学校幼稚部に入り、2年間発語の訓練をしました。私が子どもの頃は学校でろう者の手話は禁じられていました。ろう者は耳から音が入ってこないで、声を出すことはとても大変なことで、学校で声を出す方法を習いました。上級生の手話を見て使おうと、母から叱られました。母は「教育ママ」で、発語にはきびしく、家でも練習をさせられ、それがとても嫌でした。母は学校の送り迎えをしてくれましたが、学校の友だちと遊びたくても遊ばせてくれませんでした。でもそのおかげで声を出してしゃべるようになりました。

幼稚部2年の時、ヘレンケラーさんが学校に来ました。私は洋服のことに一番関心があり、ピンクのドレスを着て小さな花のいっぱい付いた帽子をかぶり、背の高いきれいな人でした。耳が聞こえない、目が見えないということでしたが、とてもきれいな青い目をしていて信じられませんでした。係の人がヘレンケラーさんの手を触って、自分の指を動かしていました。後でそれが触手話だということを知りました。子どもだったので「障がい」ということは考えませんでした。今でも私は、聞こえないことが普通だ

から不便じゃないと思っています。

戦争が激しくなって昭和19年、阿蘇に疎開して母と畑をしりました。戦後、熊本に戻り学校に通いました。18歳で学校をやめて洋裁学校に通ったり、編物、お花など花嫁修業をしました。

### 主人との生活

主人は暮れて仕事が忙しく結婚式にも出席できませんでした。主人の母は、ろう者の息子に嫁がきてくれるとすごく喜んでくれました。父と主人の母と仲人さん、私の4人で26時間かけて東京に着いた時は、汽車のスズで顔はまっ黒でした。写真の印象は良かったのですが、本人に会ってとても優しくうなで安心しました。

文京区の根津で新しい生活を始めました。ガスを使うのが初めてで怖かったです。使い方は主人の母に教えてもらいました。主人は上野松坂屋の洋服を作る仕事で家でした。私もポケットやボタンホールなどを手伝いましたが、へただと「やるな」と言われました。仕事に厳しい人で、モーニングやタキシードなど高級なものが多く、腕の良い職人で賃金もよかったです。

その後、主人は松坂屋から青山にある洋服屋さんに移りました。昭和63年に、青山のお店が閉店したのを機会に洋服の仕事は辞めました。それからウイスキーの会社で早朝の掃除の仕事をし、65歳で辞めた後は、市ヶ谷にあった会社へ2人で早朝パートに通いました。

外国旅行には、平成2年に娘がハワイで結婚式を挙げたばかりに6回くらい行きました。53歳でダイビングもしました。カヌーにも2人で乗りました。初詣にも2人で明治神宮に行きました。今は1人なので近くの神社に行っています。主人は、孫の顔も見て、平成8年に70歳で亡くなりました。

### 娘の居なくなった部屋

昭和34年に出産のため熊本の実家に帰りました。12月に娘の貴美子が生れました。泣いている顔を見て「あつ、私はお母さんになれたんだ。私の赤ん坊だ」と、

うれしくて涙が止まりませんでした。娘が泣いたらすぐわかるように、真ん中にして川の字に寝ました。昭和35年渋谷のアパートに引っ越しました。一部屋だったので、寝るのも食べるのも仕事も一緒でした。

10ヶ月になった娘を、言葉で不自由な思いはさせたくないと思い、東京都が昭和35年10月1日から始めた家庭福祉員制度(保育ママ)に、一番に渋谷区役所に駆けつけて申し込みました。家から保育ママさんの家には、バスを利用して30分かかります。朝夕送り迎えをし、とても大変でした。保育ママさんに、娘のことを筆談でこまごま知らせました。教員をされていた方で、熱心に娘に言葉を教えてくれました。その時のことが新聞や雑誌に載りました。

翌昭和36年父が定年になり、娘を預かると言ってきました。主人と何回も相談して、私たちは一生懸命に働いてバックアップした方が娘のためにもいいという事になって、両親に娘をお願いしました。娘の居なくなった部屋で長い間泣きました。渡さなければ良かったとも思いました。私は20日くらいたって会いに行きました。娘の「誰、この人」というような顔を見て悲しかったです。時間のある時は、主人と一緒に会いに行きました。母に「お母さんと言っているよ」といわれ「本当?」と、とてもうれしかったです。5、6歳になると、娘が「お母さん」と言っているのが普通にわかり、もう胸がいっぱいでした。2人で働いて送金しました。母が亡くなってから仏壇の下の引き出しからたぐさんの現金封筒が出てきて、兄はその時初めて送金のことを知ったようでした。



◆七五三の写真 芙蓉子さん



娘さん

昭和40年小学校に入学する時父が連れて来てくれ、ランドセルや洋服を買ってあげました。父のおかげで娘のランドセル姿を見ることができました。娘から「お父さん」と言われて、ニコニコ顔の主人の顔は忘れられません。私も服を縫って送り、娘からの「ありがとう」のハガキに、とても励まされました。七五三の時にも着物を送りました。両親は私の七五三の時と同じ髪型で写真を撮って送ってくれました。今でも2枚の写真と並べて眺める時があります。

娘は、昭和56年に熊本の大学を卒業して、東京の旅行会社に勤め、一緒に平井で暮らせるようになりました。主人は、仕事の後、家で娘と3人でお酒を飲めて「楽しい」と言って、とてもうれしそうでした。私は毎日娘のお弁当を作り、送り出す幸せな日々でした。

## 平井に住んで

昭和45年都営住宅が当たって、私は平井と聞いて江戸川区はゼロメートル地帯なので嫌でした。見学会もイヤイヤ参加しました。義理の妹と一緒に平井駅で降り、グチャグチャの道を歩きました。でも、2DK風呂付、どこもかしこも素敵で気に入って、昭和45年10月に引っ越してきました。お店で買い物の時、初めは不便でしたが、だんだんお店の人とわかり合えるようになりました。都営住宅の小さかった植木も40年以上過ぎ大きくなりました。

平成2年、娘は結婚して今は京都に住んでいます。このあいだ高校3年になった孫が私よりずっと大きくなって「おばあちゃん」と抱きついてくれました。深い愛情で娘を育ててくれた両親には本当に感謝しています。今は預かってもらって良かったと思っています。

平成8年、「江戸川区に昼間の手話サークルが無い」と江戸川区聴覚障害者福祉協会(現江戸川ろう者協会)から言われて、手話サークル「すみれ」を立ち上げました。手話を皆に覚えてほしかったからです。

平成15年から「出前ボランティア体験」で福祉ボランティアの方と小・中学校に行っています。ろう者を理解してもらうために自分のことを話し、手話の体験をする活動です。平成25年10月から平井の障がいのある人たちと「萩の会」というグループを立ち上げ、何かあった時の協力など、月一回ボランティアの人たちと仲良くワイワイ楽しんで参加しています。

### <付記>

梅野芙蓉子さんの聞き書きには、手話通訳を大森さんたちにお願いました。梅野さんとは古いつき合いで、情報の補足もしてもらいました。ありがとうございました。

必要な情報は手話通訳をたのみ、どちらでもよさそうな時はしらんぷりするの、と笑って首をすくめる梅野さん。今は小松川くすのきカルチャーセンターに通い学校で習わなかった書道や絵を習っています。周りがおしゃべりをしているも集中できると笑顔の梅野さん。趣味にボランティアにと動いています。人に慕われ、好かれていると通訳の方が言います。このあいだも近所が火事で、留守だった梅野さんを心配して元サークルメンバーの御主人が何度も様子を見に来てくれたそうです。

手話が出来なくても、ろう者とコミュニケーションはとれます。ジェスチャー、口話、筆談などです。手話では両手の人差し指と中指を使って2人がより添い歩き姿で「ボランティア」を表します。並んで歩く社会をめざし活動中の梅野さんです。

(岡西・山本)

